

## 「わたしたちは神の宮」

マルコによる福音書 11章 15 - 19 節

コリントの信徒への手紙 3章 16 節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は先回と同じところですが、今朝はその中の主の〈宮浄め〉の出来事にフォーカスを当て、神の家としての神殿と礼拝について考えて行きたいと思います。

聖書には「一行はエルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。・・・」（11：15）とあります。この乱暴とも見える実力行使の後、主は「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』ところがあなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった。」と人々に教えられたのです。〈強盗の巣〉はエレミヤ書に出て来ますが、これには二つの意味があって、一つは弱者から奪い取る強者たち、より重要な二つ目は神のものを奪い取る者、すなわち神の名を語りながら神に属するものを奪い取って行く者たちを指していました。主イエスのこの教えを聞き、人々が心打たれているのを見て、不安を感じた祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺そうと謀ります（同 11：18）。主イエスの十字架の出来事はこの数日後のことでした。

遊牧民族から農耕民族となって国を造ることの出来たイスラエルの民にとって、神殿は苦渋に満ちた歴史を貫く民族統一の象徴として、長く民の宗教的・社会的・政治的・文化的な生活の一切をそこに集め基礎づける存在でした。神殿の真ん中には、創造主なる神と神の民との間に定められた律法を中心である〈十戒〉の納められた〈契約の箱〉が安置されていました。それは主イエスの時代にも変わることなく、神殿には契約の箱が安置されていて、民の生活はすべて神殿を中心に組み立てられ、農耕民族として農耕のカレンダーとそれぞれに関連を持つ過越祭・仮庵祭・五旬祭の三大祭りも、神殿の祭りとして民の全生活の中心にありました。また当時、神殿には宗教と政治の中心を成す機関としての最高法院が置かれていて、ローマも無視出来ない存在となっていました。加えて、この時の異邦人の庭での商人や両替人の商行為は、公にも認められているもので、特に巡礼者にとっては無くては困るものでした。

そのような状況の中に、主イエスは入って行かれたのです。そこには主がこれから対決すべき一切のものがありました。イザヤ書に「わたしの家は、全ての民の祈りの家と呼ばれる。」とあるように、主は、神殿の相対的な改善ではなく、神による根源的な改善をしようとして踏み込まれたのです。つまり、この父の家である神殿の立て直しは、少年時代に、神殿を父の家と呼ばれた主イエスによってのみ、可能だったからでした。

異邦人の庭で行われたことを思う時、私たちは、この主の実力行使こそが正にメシアとしての象徴的な行動であったことに気付かされます。真の神礼拝を確立するため地上に来られた主イエスは、その十字架の死と復活によって、建物としての神殿を建てるのではなく、本来ならあり得ない罪人たる私たちを神の神殿とする、つまり、赦された罪人である私たちは自らの力によってではなく、主の霊の働きが私たちの内に働くことによって、わたしたちを神の神殿・神の宮として打ち立てられることになったのです。パウロは「あなた方は、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。」（Iコリント 3：16）と、この事を言っています。

今日の〈宮浄め〉の出来事は、この後に続く主イエス・キリストの出来事を示唆するものです。ご自身の身をもって、私たちの中に真の礼拝を打ち立てようとした主イエスの激しい思いを、集中して読んで行きたいと思います。

（説教要約 羽入田悦子）